

医学史的観点から理解する医学用語語源

杉田 克生¹⁾, 池田黎太郎²⁾¹⁾千葉市療育センター, ²⁾順天堂大学

医学用語は各時代の先人たちがその当時の医学概念に基づき命名したものである。その後各用語には複数の意味が時代とともに付加されることがあるが、元となる語源がそれぞれありその変遷を知るとは人間の思考パターンを知る良い手がかりを与えてくれる。例えば医学用語としてメランコリーとカタカナで表記すると音情報しか分からないが、語源はギリシア語“melancholia”で、「黒」の“melas”+「胆汁」の“cholē”すなわちヒポクラテス以来の4体液説のひとつである「黒胆汁」に至る。逆に当時の知識者の思考方法や文化を知ることによって、医学用語語源からその当時の医学概念を知る多くの情報を提供してくれる。

学術用語としての医学用語は普通の日常語と区別するために特別な構成をしている。それは基本的に複合語の形を取り、欧米の言語ではギリシア語・ラテン語起源の言葉を組み合わせて特定の対象を限定的に表現し、その意味が曖昧で多義的にならぬようにする。例えば、脳の奥に隠れた部分を島“insula < L. insula, an island, a detached house, apartment”というの、必ずしも「海中の孤島」ではなく、「個別の集合建築物」をすでにローマ時代に“insula”と呼んでいた。ガレーノスなどの古代の医師は、臓器の名称に身近な事物の呼称を応用していたが、これもその一例である。

thalamus (視床)はギリシア語では住居の「奥部屋」を表し、ふつうの訪問客の立ち入りを許さぬ「女部屋、寝室」を意味していた。これは視床が脳の間の奥まった場所に位置し、特に視覚などの神経の中継中枢であることから“thalamus opticus”と命名されたことによる。その後視覚以外の神経機能も含むので“opticus”と言うことばを省いた。視床に「視覚」を表す文字が含まれているのは、このような歴史を反映している。一方、中脳は中脳水道より背側の「中脳蓋’ “mesencephalic tectum”と腹側の「大脳脚(広義)’ “cerebral peduncle”に分けられる。「中脳蓋’は上丘と下丘とがあるが、上丘は視覚入力を受けることが判明し、「視蓋’ “optic tectum”とも称された。医学の新たな知見により医学用語に別称が加わる一例である。ちなみに日本では臨床上「中脳蓋’は「中脳視蓋’ と称している。

欧米で用いられている医学用語の語源はギリシア語、ラテン語である。アルファベット文字を通常用いていない日本人が理解するには、表意文字としての漢字に加えアルファベット文字を覚えねばならない。ただし漢字を知る日本人にはいわゆる外来語のギリシア語・ラテン語由来医学用語を漢字で表す際の利点もある。日本の先人が“neuron”を「神経」なる漢字で訳出した。“neuron”は本来ギリシア語“sinew (tendon, cord, bowstring; nerve, strength, vigor)”からで、「紐状のもの」を広く意味する言葉であった。それが「弦楽器の糸」や「弓の弦」を表すのも、「動物の腱」から作られていたからである。それが特に「腱、神経」などを意味するようになったのは解剖用語として使われるようになってからのことだが、ガレーノスの頃はそれらもまだ区別されておらず、単に「ひも」として書かれていた。それを翻訳する時にはその内容から「腱’あるいは「神経’ と訳し分けてきた。

本発表では種々の医学用語を提示し、医学用語語源を理解するために医学史を学ぶ利点を提示する。